

## 「ありがとネ」～言葉は怖い～

大学教育研究センター 客員教授 芳川 猛



芳川 猛 客員教授は、東海テレビのアナウンサーとして活躍した後、新人教育を担当するなど、50年近く放送業界に携わり、現在は(株)東海テレビプロダクション相談役を務める。本学との関わりは、2003年度入学予定者に向けた「中部大学オリエンテーションビデオ」の製作が最初で、2011年度からは客員教授として、これまでに「講義のための『話し方の基本』」をテーマとした「教員キャリアアッププログラム」を6回実施、「授業サロン」のオブザーバーとして延べ20コマ以上の授業を見学し、教員と意見交換するなど、「ことば」を通じた教育力の向上にサポートいただいている。これらを踏まえて今回は特別に寄稿をお願いした。

うな場面で使う。「良くできたわネ、ありがとうネ」というふうには。この場合でも「ありがとネ」とはならない。従ってこの「ネ」は目上の者が目下、というより子どもに使う言葉の「ネ」である。

このニュアンスを知らないまま東京で、大人同士の会話中「ありがとネ」とやってしまうと、「なんて失礼な、私は子どもではないわ」と相手を怒らせてしまう。もう一つ付け加えると「ありがとッ」という言い方にも私は引っかけがある。これも相手を目下に見た言い方だと感じている。文字にするとこれらの言葉のニュアンスを上手く伝えられないのがもどかしい。

東京弁の中で育った人を勝手に東京弁ネイティブと呼ぶなら、名古屋弁ネイティブ、関西弁ネイティブ、東北弁ネイティブがいる。それぞれの方言にはネイティブにだけ理解できる言い回しやニュアンスがある。叱り方にしろ、褒め方にしろ、よほど気をつけないと知らないうちに相手を傷つけていたり、相手に失礼だったりしている。

先日、市民病院へ耳の治療を受けに行った。ビックリである。案内の張り紙に「患者様へ」とあった。少々偉くなったような気になる。昔、「お客様は神様だ」といった歌手がいたが、患者は病院の客なのだから、神様扱いされるのか。

そのせいか、「病気が治らないのは医者のせいだ」「何時間待たせるのだ」「看護師の態度が横柄だ」など窓口でクレームをつける患者様が増えたらしい。大声で怒鳴っている患

実に頭の痛いことである。『ANTENNA』誌の何処を読んでてもアカデミックな文章ばかりである。学問とはおよそかけ離れた虚業の世界で生きてきた私に、あのような文章など書けるわけがない。私は悩んだ。古希を過ぎて、またまた世間に恥をさらすのかと。しかし、今から断ったら担当者に迷惑がかかるだろうなあ、などと迷った挙げ句、NOと言えない私は、拙文をしたためることを覚悟したのである。

日本語は言うまでもなくいわゆる共通語の他に、各地に方言がある。東北弁、名古屋弁、関西弁…などなど。方言はその地域の人たちにしか分からない独特の響きをもって微妙なニュアンスを伝えている。

入社して間もない頃だが、私は上司から「たわけ」と怒鳴られたことがあった。かなりのショックだった。東京で生まれ育った私は、「バカ」といって叱られたことはあったが、

「たわけ」は初めてである。関西弁の「アホ」とは違う逃げ場のない衝撃であった。「たわけ」に「ド」がつくとこれは強烈である。最近、ある民放局で新人アナウンサー（男性）の研修をした時のことである。彼は横浜の出身だった。その彼に「たわけ」「あほ」「ばか」のうちどの言葉が一番胸に刺さるかを尋ねたら、やはり「たわけ」だという。「ドたわけ」になったら僕は立ち直れません、などと弱音を吐いていた。ところが不思議なものである。名古屋に長いこと住んでいると、「たわけ」に慣れてしまう。関西弁の「アホ」もいつの間にか使っている。言葉の上で名古屋人になっているのだ。

我が家のすぐ近くで主婦同士が長い立ち話をしていた。別れ際、一人が「ありがとネ」といって帰っていった。よく耳にする会話である。ところがこの「ネ」が曲者である。この地方では大人同士がちょっとした礼を言うときに「ありがとネ」という。東京ではそうは言わない。「ありがとう」もしくはもう少ししていねいな言い方なら「ありがとうございます」である。「ネ」を付けて「ありがとうネ」という場合は、例えば母親が、お使いが上手に出来た子どもに対して褒めてやるよ



第8回FDフォーラムの様子(2011年10月)

者様を見るとこちらが恥ずかしくなってくる。

学校では「うちの子どもの成績が悪いのは教え方が悪いからだ」とイチャモンをつける親がいるとか。どこかオカシイ。大学ではそんな現象は起きていないのだろうか。

昨年の衆議院選挙では政治家の言葉遣いのひどさに辟易した。「法案を提出させていただきます」。今に始まったことではないが、なんであのように揃いも揃って「～させていただきます」というのだろうか。堂々と提出すればいいのである。

最近、といってもかなり以前からだが、曖昧な表現や自信の無い言葉遣い、責任を回避するような言い回しが目立つようになってきた。「～してもらってよろしいでしょうか」も街に氾濫している。私は「よろしいですか」と聞かれたら「よろしいですヨ」と嫌みを込めて返事をするのだが、相手はその「嫌み」を感じてくれない。

「薬物とかは怖いからやめた方がいいかなと思う」というような「とか」「かな」を使う話し方は蔓延している。

さらには語尾が上がる話し方、これは相手に同意を求めているようでもあり尋ねているようでもあり、まことに自信の無い話し方である。

一方では過剰敬語が氾濫する。「患者様」もそうである。過剰な敬語は相手に失礼である。

言葉は「社会を映す鏡だ」と思う。言葉遣いから今の日本の姿が見えてくる、と言ったら「たわけ」と叱られるだろうか。責任は取りたくない、相手には嫌われたくない、「エエ格好」だけはしたい。脚本家の内館牧子さんはある新聞のコラムで「日本人の話し方が不気味なまでに醜悪になった」と断じた。そして「日本人の弱腰や生きる姿勢の劣化が影響している気がしてならない」と述べている。同感である。

大学教育研究センターの「キャリアアッププログラム」や「授業サロン」の仲間に入れていただいて2年になる。おかげで大勢の先生の講義を拝聴した。私にとっては半世紀ぶりのことで、学生時代に戻った気分になった。しかし、授業の方法は様変わりしている。ビデオやパワーポイントを使うのは当たり前、時には携帯電話まで駆使している。そして学生に配布する資料なども用意して講義が始まる。先生方の事前の準備はいかほどかと推察する。講義は個性的でパワフル、魅力に満ちている。次の週も受講したいと思った講義がいくつもあった。

実は私の仕事は講義を聴くことから始まる。先生方の講義内容がしっかり学生に伝わらなければ、事前の準備も無駄になってしまう。そこで私は先生方の話しぶりに聞き耳を立てるのである。発音、発声、アクセント、話し方や言葉遣い、そして先

生の出身地、すなわち何処のネイティブかを推理する。さらに、声量、マイクの使い方などにも目を配る。アナウンサー顔負けの美声の先生もいれば、マイクを上手に扱う人もいる。中には学生の集中力が途絶えないよう時々声色を変える先生もいた。私にとっては“サプライズ”である。

正直なところ、私は、内容が正確に伝わりさえすれば、東北弁だろうと名古屋弁だろうと構わないと思っている。講義を聴きながら方言の温かみを再発見することもしばしばあるのだ。しかし、学生は全国から集まってくる。いろいろなネイティブがいる。先生方も同じである。異なるネイティブ同士の微妙なニュアンスの違い。私のような仕事をしてきた者は、どうしても他人の話し方に敏感になってしまうのだ。

こうした多くの講義を聴きながらふと思ったことがあった。先生方は、教える側と教わる側という関係の中で、学生を大人としてどう位置付けるか、戸惑っているのではないかと。

それが講義中の言葉遣いになって現れる。「覚えていただくのは」「減点させていただきます」「今日のお話しは」「分かったか」などなど……。教師と学生との関係も、私の学生時代とはかなり変わっているようである。

言葉は怖い。微妙なニュアンスの違いが時として誤解を招く。内館牧子さんが指摘するように、日本人としての生き様が言葉や言葉遣いになって現れるとしたら、なおさら怖い。

独断と偏見の拙文である。異を唱える方もいらっしゃると思う。失礼をお詫びしてこのアカデミックでない文を閉めさせていただくこととする。

最後までお読みいただき「ありがとうネ」……。おお怖っ！



教員キャリアアッププログラムでのボイストレーニングの様子